活動紹介

早稲田大学海外ボランティアリーダー養成プロジェクト・イン・ボルネオの活動
——マレーシアのフィリピン人移民とのかかわりを中心に

金田尚子*
KANEDA Naoko*

はじめに

本稿では，早稲田大学の学生を主体とする実践的教育プロジェクト，「海外ボランティアリーダー養成プロジェクト・イン・ボルネオ」（以下，ボルネオプロジェクト）のマレーシア・サバ州におけるボランティア活動とフィールドワークを紹介する。また，あわせてボランティア活動における地域の文脈と文化の理解の必要性についても短く検討する。ボルネオプロジェクトは，2006年に早稲田大学平山郁夫ボランティアセンター（WAVOC）の活動の一環として組織された[1]。プロジェクトのメンバーは，同年以来，サバ州のフィリピン人移民集落において継続的にボランティア活動と現地理解において不可欠なフィールドワークに従事している。

ボルネオプロジェクトは，ボルネオ島の人びと，主にはマレーシア領サバ州の人びとと「お互いにしあわせを感じ考える場を創る」という目標を掲げている。ここでの「しあわせ」には，巡りあわせという意味での「仕合せ」と，幸福という意味での「幸せ」の双方の言葉がかけあわされている。この目標が示すようにこのプロジェクトは，人と人との出会いを大切にし，「互いのしあわせを感じ，考える」ための場を創り，またそのための想像力を醸成することを目指している。

プロジェクトのメンバーは30人強で，早稲田大学の学部生および大学院生で構成される。メンバーは，長期休暇の期間である2-3月と8-9月の年に二回，それぞれ約3週間渡航し，調査とボランティア活動に従事する。渡航費は学生が各自負担する。わたしは，発足時から2010年3月まで同プロジェクトに参加した。2008年度には，プロジェクト・リーダーの1人を務めた。プロジェクトは現在も継続されている。

I　プロジェクトの経緯

ボルネオプロジェクトは現在，衛生環境の改善に取り組んでいるが，ここではそれに至るまでの経緯を概観する。

ボルネオプロジェクトの特徴は，活動の目標，内容，スケジュール，手続きなど，ボランティア活動とフィールド調査の一連のプロセスすべてを学部学生自らが立案し，実践することにある。発足当時は，プロジェクトの対象をボルネオ島のマレーシア領サバ州とすること以外，詳しい活動地域や具体的な活動の内容，目的は決まっていなかった。

プロジェクトが開始され，はじめてサバ州を訪問した2006年3月に，メンバーが関心を向けたのは，州都コタキナバル（Kota Kinabalu）の街に住む路上生活の子供たち，いわゆるストリートチルドレンであった。かれらのほとんどは，フィリピン南部出身の移民の子供であった。サバ州はフィリピンと国境を接している。1970年代以降，現在まで，

* 早稲田大学大学院政治学研究科；Graduate School of Political Sciences, Waseda University, 1-6-1, Nishi-Waseda, Shinjuku, Tokyo, 169-8050/ anavrin1867@gmail.com

1) WAVOCは，「社会と大学をつなぐ」「学生への学ぶ機会の提供」「学生の社会貢献の応援」を理念として掲げ，2002年に早稲田大学の付属機関として設立された。WAVOCには，ボルネオプロジェクトの他，教育支援や人権など様々な分野にかかわる30以上の実践的な教育プロジェクトが実施されている。

治安と経済状況の不安定さのため，フィリピン南部の人びとはサバ州に流入し続けている。その多くは，合法的な滞在許可を持たない移民，つまり「不法移民」である。

フィリピンからの移民は，サバ州において最貧困層を占めている。かれらの社会的地位は，多くの場合，きわめて不安定である。不法滞在が発覚し，マレーシア連邦政府の移民局によりフィリピンに強制送還されることも少なくない。その際，親のみが送還され，子供が残されてしまうことがある。その子供たちは，しばしば路上でタバコやスナック菓子を売りながら暮らすようになる。上記のストリートチルドレンには，こうした子供たちが少なからず含まれていた。

コタキナバルの街のストリートチルドレンは，ボランティア活動による支援を必要とする人たちであるように思われた。しかしながら，かれらの多くは住居不定である。またかれらの法的身分は，たいてい不法滞在者である。本プロジェクトがかれらと本格的にかかわり，調査・ボランティア活動を組織することは，プロジェクトの資金や時間の面での制約や，メンバーの調査能力とボランティアの能力を考えると困難であった。

こうした判断をふまえつつもプロジェクトのメンバーは，ストリートチルドレンの家族や親族が住む一つのフィリピン人移民の集落を訪問した。この訪問が，ボルネオプロジェクトの具体的な活動を創案する契機になった。訪問したメンバーは，こうした集落において調査とボランティア活動を組織し，フィリピン人移民の生活を支援することは可能であると考えたのである。

2006年8月の渡航時，メンバーは活動拠点をコタキナバルの街から数キロほど離れた沿岸部に位置するA村（仮名）に定めた。A村はフィリピン・スルー諸島南部出身の移民の集落である。人口は約4000人。住民はすべてムスリムであり，民族的にはサマ・バジャウ（Sama-Bajau）人が多数を占める。すべての家屋は海上に建てられた杭上家屋である。

A村できわめて印象的だったのは，氾濫するゴミの存在であった。海上集落であるA村では，ゴミは海に投げ捨てられる。A村が位置する海岸は湾曲して内部に入り組んでいる。そのため，ゴミはなかなか外洋に流されていかない。結果，浜辺や家屋の周囲の海面は，ゴミであふれてしまうのである。

マレーシアでは，ゴミの収集は市や郡の自治体（majlis）が管轄している。しかしゴミの収集車は，A村にはほとんど来なかった。下水も整備されておらず，海に垂れ流しであった。メンバーは，こうした衛生環境の改善をプロジェクトの具体的な目標に定めた。2007年3月の訪問時には，村で子供を対象とする環境教育の授業を実施した。同時に，さまざまな子供向けの催しを通じて，衛生環境に関する意識の向上を促そうとした[2)]。子供とともに大規模なゴミ拾いも行った。

こうした活動の影響は，しかしながら限定的でしかなった。活動後の話し合いでは，メンバーのあいだで，子供ではなく大人の衛生に対する意識が変わらなければ村の衛生環境は改善されないこと，あるいはこの村にゴミ回収車が来ないことの政治的意味を考える必要があることなどが指摘された。さらには，衛生環境の改善はそもそも村人が求めていることなのか，かれらにとって必要なことなのかという疑問も出された。本プロジェクトのメンバーは，その時までA村の住民（大人）とじっくり話しあう機会を設けてこなかったのである。そこで次回の訪問時には，住民と共に話し合い，かれらの要求，必要につ

2) たとえば，メンバーは日本の子供向けテレビ番組を模した創作劇「ゴミレンジャー」を実演し，また「ゴミ拾いの歌」を作った。

いて検討することを決定した。

2007年8月の訪問時には，A村の住民がメンバーとの話し合いの場を設けてくれた。リーダー，30歳代以上の男性，同女性，20歳代以下の青年といった小グループを設定し，メンバーはそれぞれのグループと，かれらの生活環境全般について話し合い，かれらの要求，必要を探ろうとした。なお，話し合いは通訳を介して行った。プロジェクトメンバーは英語で発言し，通訳はそれをマレー語に訳し，村人に伝えた。他方，村人はマレー語で発言し，通訳がそれを英語に訳した。

話し合いの結果，ゴミ・衛生問題はかれらの主要な関心のひとつであることが確認された。ゴミ回収のシステムや下水が整備されていない。ゴミや下水は海に排出される。そうした海水のなかを子供たちが泳ぐ。そのため，皮膚病やコレラに罹る子供が少なくない——こうした意見は多数の人が述べていた。かれらは，けっして衛生環境に無関心ではなかったのである。

問題は，その解決のための方途が，村単位でもまた構造的にも見出しづらい点にあった。村単位での解決法とは，村人自らが協力しあってゴミ収集をすることなどを指す。構造的な解決法とは，行政によるゴミ回収システムの改善を指す。ただし後者に関しては，A村が移民集落であるため，行政により軽視されているという複雑な問題もある。ゴミ回収問題は，サバ州における移民の政治的，社会的位置づけをめぐる問題とも関連していたのである。

ともあれ話し合いの結果，メンバーは上記のことを確認することができた。そこで本プロジェクトでは，今後は，学部学生の尽力でできることと村長をはじめとする村人からの要望とを調整しつつ，かれらと共に衛生環境の改善に本格的に取り組んでいくこと，同時にそうした活動の基盤をなす村の民族誌的情報について調査を進めていくことを決定した。

II　A村の概観と移民の位相

A村の家屋のほとんどは海上に建てられた杭上家屋である。村長によれば，その多くは，2001年に州政府によって作られた。AからKまでのブロックまであり，各家には番号が付されている。家と家の間は狭い。ほぼすべての家は橋でつながっている。政府の作った家は規則的に連なっている。集落の海側の端には，後の移住者が独自に建てた家屋が連なる。それらの家は，非規則的に並んでいる。海側のこの一帯には，マレーシア国籍を持つ人とマレーシア国籍を持たないフィリピン人移民とが混住している。

村にはスラウ（surau，礼拝所）があり，毎週金曜日には集団礼拝が行われる。民族（bangsa）に関しては，村人の多くは「バジャウ（Bajau）」と名乗る。陸地部に住む人は，自らを「ローカルのバジャウ」と呼び，海上部の住民とは「民族が違う」と語っていた。海上部に住む人は「バジャウ・ウビアン（Bajau Ubian）」と自称することもあった。陸地部の人が言う「違い」は，言語や文化の差異ではない。それは，居住期間の長さ，あるいはマレーシア国民としての時間的長さに関する差異である。しかしそれは，「民族の違い」として認識されている。「ローカルのバジャウ」という表現は，それを語る人がもともとからサバ州に住むバジャウ人であることを含意している。他方，その「ローカルのバジャウ」がバジャウであっても「違う民族」であると述べている人びととは，フィリピンから「移住してきた」バジャウを指しているのである。

行政がA村のゴミ回収に本格的に取り組もうとしないことの背景には，こうした「民族認識」もあるように思われた。つまり，A村はフ

ィリピンからの移民の村であるために，行政から軽視されていると推測されたのである。

A村では，家族どうしではバジャウ語で話すことが多い。しかし，住民の多くはマレー語も話す。一部の村人は，英語やタガログ語を話すこともできる。英語やタガログ語の話者は，主にフィリピンで学校教育を受けた人たちである。

村の主な生業は，漁業と建設業である。漁業従事者は，まず船を持つ人と持たない人に分けられる。前者はさらに自ら操業する人と，自らは操業せず親族などを雇用して操業させる人に分けられる。後者は船主に雇用されて操業する人である。それぞれの収入は大きく異なる。船主に雇用される漁業従事者の収入がもっとも少ない。

建設業従事者の多くは，日雇い労働者である。かれらは，周辺地域におけるビル等の建設現場で雇われていた。他には，コタキナバル市内の商店やショッピングモールで働く人もいる。商店での賃金労働者は若い世代に多い。

サバ州には，フィリピンからの移民が多数居住している。1990年，合法的な移民労働者はサバ州に約5万人いた。サバ州には，その他にインドネシア人の非合法労働者が12〜14万人，フィリピン人の非合法労働者が10万人はいた／いるといわれる。この推計値は少ないほうであり，マハティール首相（当時）は，サバ州人口の半分はフィリピンおよびインドネシアからの不法移民からなると述べている［石井 1991: 42］。

サバ州における近隣諸国からの不法移民の多さの要因としては，同州がフィリピンおよびインドネシアと地理的に近接しており，かつこの一帯では国境制定以前から在地住民の往来が頻繁で，そうした往来が現在まで続いていることがあげられる。バジャウ人をはじめとする在地住民の移動は，①近代国家等の外部権力の暴力や制度からの逃避，②自由な交易や労働市場へのアプローチ，③海産資源，特に経済的価値の高いナマコやフカヒレ等の希少海産資源の探索などを動機として繰り返されてきたとされる［長津 2001: 183］。

この地域に国民国家が確立された後も，かれらはそうした移動を続けてきた。サバ州における不法移民の多さは，こうした歴史的持続性も背景となっている。

III　現地での取り組み

このような背景をもつ移民集落において，衛生環境の改善に向けた活動をどのように実践しているかを，以下で見ていく。

プロジェクトメンバーがA村の住民とのコミュニケーションをとる際には，現地のカウンターパートであるサバ・マレーシア大学（Universiti Malaysia Sabah）のマレーシア人学生に依頼し，英語をマレー語に通訳してもらっている。マレーシア人学生に協力を依頼しているのは，かれらにフィリピン人移民と直接，関わる機会を持ってもらいたかったからでもある。一般にマレーシアではフィリピン人移民は蔑視されており，社会的に周辺化されている。マレーシアという枠組においてフィリピン人移民の生活環境の改善をはかるためには，まずはマレーシア人に移民の現実の生活を見てもらう必要があるとわたしたちは考えた。さらに，貧困や不法滞在などの問題について，同世代のマレーシア人と一緒に検討してみたいと考えたのである。

2007年8月以降，A村で行っている活動の概要は次の通りである。第一は，村長を中心とする住民との衛生環境の改善に向けた話し合いである。話し合いは，年二回の訪問のたびに行っている。会合の際には，滞在中の実際の活動計画をともに検討する。

第二は，ゴミ拾い活動である。ゴミ拾い活動は，毎回，村人とともに実施している。住

民には，ゴトンロヨン（gotong royong）という言葉で協力を呼びかけている。ゴトンロヨンとは，マレー語で「助け合い」を意味する。ここでは，コミュニティ内で住民が協力して解決すべき問題に取り組むことを含意している。ゴミ拾いの活動において，ゴトンロヨンという言葉を用いるのは，それが行政に対して効果的でもあるからである。すでに述べたように，行政はA村でのゴミ回収に消極的である。しかし，ゴトンロヨンによりゴミ拾いを行ったと伝えた時には，しばしばゴミ収集車を差し向けてくれるのである

第三は，住民の生活環境に関する調査である。プロジェクトのメンバーは，各世帯を訪問し聞き取りを進めている。聞き取り調査では，村の生活実態を把握するために作成した質問票を用いている。調査の結果は，帰国後に整理して報告書に記載する。こうして調査結果は，次の調査のためにメンバー間で共有されることになる。

IV　発足から３年までの成果

2007年8月の訪問時，本プロジェクトは活動の焦点を衛生環境の改善におくことに定めた。それ以降，住民とプロジェクトメンバーとの間で，ゴミ問題を解決するための方策が模索された。その結果，A村内部におけるゴミ回収システムの確立が不可欠であることが確認された。それに対する働きかけとその成果を以下で見ていく。

わたしたちは，村長と共にコタキナバル市自治体や州議会議員を訪れ，ゴミ回収システムの確立のための協力を依頼した。協力依頼は受け入れられ，2008年3月の訪問から8月の訪問までの間に，村でのゴミ回収システムを整備するための作業が進められた。住民からは1世帯あたり2リンギット（約60円）の協力資金が集められた。その資金を基に，市自治体は集落のブロックごとに複数のゴミ箱を設置した。市自治体がゴミ回収車を手配することも約束された。

しかし，会計システムの不明瞭さなどのため，一部の住民は協力資金の支払いを拒否するようになった。また，ゴミ回収車によるA村のゴミの回収は，徐々に不定期になっていった。こうしてA村におけるゴミ回収システムは頓挫してしまった。

衛生環境を抜本的に改善するためには，多額の資金，行政の体系的な関与，そして何より住民の主体的な姿勢が不可欠である。ボルネオプロジェクトの働きかけのみでは，その実現は不可能であることが，この時の失敗により明らかになった。

とはいえ，将来の村の衛生環境の改善に向けて，ボルネオプロジェクトが村に与えた影響はけっして小さくなかったと思われる。そうした影響の現れとして，たとえば一部の住民のあいだには，自発的に衛生環境を改善しようとする意識や態度が生じるようになった。特に村長は，ゴミ回収システムを確立するために，プロジェクトメンバーが不在の間も行政や住民との話し合いを続けるなど，村の衛生環境の改善のために様々に尽力していた。

また，プロジェクトの学生，つまり外国人学生が関わることにより，A村の住民，村長，行政，州議会議員は，衛生環境の改善についてともに検討するようになった。完全な他者であり，かつ在地住民の注目を集めやすい外国人学生の関与は，日常的にはあまり直接的に接触することのないアクターどうしを結び，かれらが協力する場を作る契機のひとつになったと考えられる。

V　今後の課題

ゴミ問題解決に取り組みはじめていた村

長や行政職員は，上述のように取り組みが頓挫してしまったため，現在ではA村でゴミ回収システムを作ることをあきらめつつある。村長，行政職員，そしてプロジェクトメンバーと他の住民との，話し合いと相互理解が不十分であったことが失敗の原因のひとつであったことは，否定できない。では，わたしたちに求められている姿勢はなんなのだろうか。

「衛生」は，他の様々な概念と同様に文化的に規定された概念である。衛生概念の基盤をなす「清潔」が，絶対的な基準を持たない相対的な概念であることもいうまでもない。他方で，この地域におけるゴミ問題は，移民をめぐる政治的な問題とも密接に関係している。

ボルネオプロジェクトは，これらの点を再認識したうえで，かれらの衛生環境の改善のためのオルタナティヴな関与のかたちを模索する必要に迫られているように思う。衛生環境の改善，特にゴミ問題は，バジャウ人をはじめとする海民ないし移動民にとって，あるいはサバ州で周辺化されているフィリピン人移民にとって，どのような意味でいかに問題なのか――こうした自らへの問いかけを，住民との対話を通じて，再度，考えてみるべきであろう。

参　考　文　献

石井由香
1991　「ASEAN各国における「人の移動」―マレーシア・シンガポールを中心にして」　『国際関係学研究』18（別冊）：33-46.

長津一史
2001　「海と国境――移動を生きるサマ人の世界」『海のアジア 3 島とひとのダイナミズム』尾本惠市・濱下武志・村井吉敬・家島彦一（編），173-202ページ，東京：岩波書店.